

小児のプライマリ・ヘルスケアの確立に関する研究

—— アメリカワシントン州キティタス郡における保育所機能の現状 ——

田 川 智 子
(保健研究室)

Studies of Current Primary Health Care of Children
— A current situation re day nursery functions
in Kittitas County, Washington State, U.S.A. —

Tomoko TAGAWA

Keywords : Health care, day nursery, function, America

キーワード：ヘルスケア 保育所 機能 アメリカ

I. はじめに

近年、女性の社会進出や核家族化がすすみ、わが国においても家庭の育児力が著しく低下し、地域の育児力、教育力が重要になってきている。これからは、ますます子供をとりまく環境として、Community-developmentの概念が地域社会に浸透し、根づいていくことが期待される。

私は過去、小児のCommunity-based primary health care²⁾の確立に関する研究を行った中で、子供を全人的にとらえていく視点の重要性に加えて、家庭と働く母親の職場と子供を預かる側の保育所がダイナミックに機能することができる地域社会の環境をシステムとして整えていくことがいかに大切であるかを示唆してきた(田川 1988・1993³⁾⁴⁾。

保育実践にもPrimary・care・nursing⁵⁾の規定理論を応用・導入し、保育施設がシステムとして機能していくことが必要であると思われる。プライマリ・ケアとは何か？ 施設の質とは何か？ また、施設

がサービスの提供に関する地域的枠組みにどのように組み入れられるのか？ 他のどんな地域資源と関係しているか？ など、改めて考えることが、その施設の変革となって新しいプログラムを生み出してくれるであろう。

1993年の夏、アメリカワシントン州における保育施設の視察の機会に恵まれ、アメリカの「Primary care nursing research」の歴史に学ぶべき若干の示唆を得たので報告する。

本稿では、視察(Knowledgeability Questionnaire)を終えて、私が特に印象深かった二つの施設をケーススタディとして取り上げ、日本における保育所のケアのシステムを地域との関りの中で追求していく上での一助としたい。

II. ワシントン州キティタス郡の概要

キティタス郡(Kittitas County)は地理的にみるとワシントン州にあるカスケード山脈の東部に位

置している。

キティタス郡の中心地であるエレンズバーグ (Ellensburg) はワシントン州の中央に位置し、州間連絡国道82号線と90号線との交叉するところにある。キティタス・ヴァレーに所在するが、地勢はおおむね平坦で、海拔457～481mの高さに位置する。約23mのクレイグズ・ヒルが町の東側にある。

職業訓練地域カレッジ：ヤキマヴァレー・カレッジ (Yakima Valley College) 成人教育センターがエレンズバーグにある。クラスの平均学生数は15名で、7種の技能教育が行われている。

4年制の短科・総合大学：セントラル・ワシントン大学 (Central Washington University) がエレンズバーグにある。1989～1990年秋現在のパートタイムの学生数は1,015名、フルタイムの学生数は

6,341名である。(CITY PROFILE : TABLE 1. ～3.)

Ⅲ. 視察結果及び考察

1. アメリカの幼児の状況

アメリカでは、一般に働く母親や若年層の母親が多く、デイケアセンターに求められる社会的ニーズが高い。

また、親や家族がアルコール依存症であったり薬物中毒症に罹っている場合も少なくないことから、家庭環境のストレスを大きく受けている子供達が多い。

Kempe (1962)⁶⁾の報告以来、欧米で被虐待児童候群が、年々増加傾向にあることが指摘されているが、今回の施設訪問によってその深刻さを肌で感じた。

1991年の報告では、アメリカの子供の虐待又は放

TABLE 1. DEMOGRAPHIC DATA

	1970	1980	1984	1986	1988	1989
County Population	25,039	24,877	25,000	25,000	25,000	25,400
Cle Elum	1,725	1,773	1,820	1,820	1,815	1,760
Ellensburg	13,568	11,755	11,590	11,400	11,500	11,730
Kittitas	637	853	935	940	920	750
Roslyn	1,031	938	980	965	960	840
South Cle Elum	374	449	480	480	490	480

TABLE 2. EDUCATIONAL FACILITIES DATA

		Number of Schools	Total Teachers	Fall, 1990 Enrollment
Kittitas County	Public	14	n/a	4,095
	Private	0		
Ellensburg	Primary	3	54	1,717
	Secondary / Alternative ed.	2	66	648

TABLE 3. MEDICAL FACILITIES DATA

All facilities are in the Ellensburg and Cle Elum areas.

		Number	Total Capacity
Kittitas County	Hospitals	1	50beds (4 ccu's)
	Clinics	4	
	Doctors	31	
	Dentists	11	
Ellensburg	Hospitals	1	50beds (4 ccu's)
	Clinics	3	
	Doctors	14	
	Dentists	9	

置の数は270万件にも及ぶが、保育所長をはじめ、保母やセラピスト、またメディカルセンターの医師や看護婦とディスカッションする中でも必ずこの虐待児の問題が議題にされ、今アメリカ大国が抱えている社会的な問題としてクローズアップされた。

2. アメリカのNursery System

1) セントラルワシントン大学付属の保育所 (Central Washington University Preschool)

保育所は大学に隣接し、エレンズバークのブルックラン (Brooklane Village) に設置されている (第4表)。

多くは、大学関係者の子供達が入所しており、デイケアセンターとしての重要な役割を果たしている。また、子供を連れて学校へ行かなければならない学生である両親のニーズにも応えている。

子供の成長、発達に応じた養育と教育のプログラムによって安全で意欲を高める環境を提供している。

このような制度の目的は、1日の中である時間だけ、子供に家を離れるということに慣れさせ、グループになって学ぶということを教えるためであり、他の子供や大人達と一緒に遊ぶ社会的な能力を身につけさせる機会となる。保育所の先生との新しい関係

から、子供は家族の他にも面倒をみってくれる人のグループがあることを学ぶ。

2) キティタス郡児童擁護審議会

(CHILD ADVOCACY COUNCIL OF KITTITAS COUNTY)

児童擁護審議会はキティタス郡における児童向けの擁護治療機関で、クレエルムからイトンまでの郡北部全域を対象とするロズリンとエレンズバークに能力開発学習センターを置いている (第4表)。

設立5年目と歴史は浅いものの、児童のための擁護治療活動はストレスの多い家庭のハンディキャップに対する総合的、多角的な対応手段である。その主たる目標は、子供を虐待から守ることである。子供へのサービスの内容は、栄養補給、医療監視、就学前学習、遊びを通した心身療法、休息、清潔励行、必要に応じた移動、家庭環境の観察、特に一貫して愛情に包まれた環境の維持……などがあげられる。

1日6時間 (移動を含む)、1週5日、年間を通したプログラムによって、愛情に満ちた児童の育成ができ、異った生き方の専念が可能となる。

両親向けにもいろいろなサービスが用意され、問題を抱えている若い親達から、経済的不安定、アル

第4表 視察施設の概要

	Central Washington University Preschool	CHILD ADVOCACY COUNCIL OF KITTITAS COUNTY
施設規模		
乳児数	0人	1人
幼児数	54人	38人
設置基準	保母1人対幼児5人	保母1人対3人 (生後1ヵ月から2歳児まで) 保母1人対幼児5人 (2歳児から5歳児まで)
職員構成		
保母	20人 (専任2人, 嘱託18人)	10人
医師	0人	1人 (嘱託)
看護婦	0人	1人 (嘱託)
セラピスト	0人	4人 (嘱託)
栄養士	0人	1人
調理師	0人	4人 (嘱託)
用務員	1人	2人
運営方針	(1) 大学の基本方針に基づき、保育所ではできるだけ子供達のニーズを尊重 (2) 親とスタッフ及び学生スタッフとの連携の充実 (3) フレキシブルな構成	(1) 一貫して安全な養育環境 (2) 経験豊かな児童問題担当職員 (3) 清潔さ、意欲喚起、充実した活動

第5表 保育に関する意識調査 (Knowledgeability Questionnaire)

	保 育 所 長	ボランティア	セ ン タ ー 長
プ ロ フ ィ ー ル	34歳・女性 勤続9年 有資格	29歳・男性 勤続9年 小学校教員	54歳・女性 勤続11年 有資格
保 育 勤 務 の 動 機	大学の卒論テーマが幼児教育のため就職へ結びついた	自分の保育への理想を実現しなかった 社会的機能として保育の重要性を感じた	ハイリスク児を担当した経験を生かし、さらに多くの子供達や家族、地域に貢献したいと考えた
保 育 所 の 役 割	現代社会の保育ニーズに応え、デイケアセンターとしての機能の充実 心身の成長、発達に応じた適切なしつけの指導	子供達が楽しく過ごせる安全でかつ健康的な場所を提供すること、親が安心して任せられる快適な環境を保障すること	ハイリスク児童を虐待から守り、一貫して慈しむ環境を保障する 子供に信頼感をあたえる
保 育 目 標	(1)各年齢層に合わせた学習経験を積ませる (2)あらゆる事象に対して肉体的、情緒的、知的に挑戦させる (3)新しいことを経験させ、楽しく過ごさせる	(1)安全性の確保 (2)子供達を楽しく生活させる	(1)学習意欲の向上 (2)自尊心の堅持 (3)社会性と情緒の発達
保 育 所 の 理 想 像	家族の入所希望に即応できる体制 子供の発達段階に応じたケア 経済的に安心できる体制	子供達が個性を生かして自由に活動できる時間とグループ活動に参加できる機会がバランス良くとれること	一貫して愛情に満ちた養育環境で子供達の安全、健康、意欲が保障できること コミュニケーション領域と発達段階が科学的に観察できること
保 育 者 の 理 想 像	子供達の成長のために自分の時間、エネルギー、思考を最大限に注げる使命感の強い人、子供にとって何が一番大切かを常に考えて行動できる人、豊かな人間性を備えた人	子供達を一人の人間として認め、常に新しい方法を求め、学ぶことの楽しさを教える人 子供と楽しみを共有できる人	信頼され親切で面倒みが良いこと 子供にしつけと教育ができる 専門的な知識と実践経験がある人
保 育 活 動 上 の 阻 害 要 因	政府の規制 ガイドラインの規制 大学内の予算の問題	予算の問題	給料の適正化 (ケアワーカーと熟練かつ経験豊富なスタッフに対する)
関 係 機 関 及 び スタッフに対する要望 保母養成機関	大学内で幼児教育に関する実証研究の時間を増やす 行政機関等での学外実習の強化	卒後教育の受入れ強化	パートタイム学生のための課程 学外実習の強化と継続的保障
市	一層エネルギーを注ぎ、さまざまな社会体験を子供達にあたえてほしい	研修や勉強の機会を増やしてほしい (全員が同時に行けない)	特別予算の強化
国	仕事をもちながら養育の責任がとれる、地域社会の実現が期待される		ハイリスク児童のための専門プログラムの必要性
保 母	自分達の仕事に打ち込む努力を怠らず、子供達と楽しく過ごすこと 使命感、探求心旺盛、豊かな人間性	教材を生かした遊びの工夫を怠らないこと	発達訓練に関する継続的教育力の充実 実践力と応用力の向上
医師・看護婦	身体状態などを子供にきちんと話してほしい じっくり話してやると子供は本当に理解力に優れている	相談しやすい体制	専門スタッフの確保

コール、麻薬の常用、乱用により精神的な病いや障害のある親達まで、問題を抱えた家庭それぞれのニーズに対応している。親達には支援グループ週間ミーティング、個別カウンセリング、社会復帰訓練教室、紹介・援護、組織内および児童保護局（CPS）連携による事例管理などを実施している。

3. マンパワーの充実

1) 専門職としての誇り

所長へのインタビューを終えて、私が強く感じたことは、実践的専門職としての自覚と誇りに関してであった。日本においても専門職に携わる者は、少なからずこうした意識や使命感をもって働いており、過去、私が行った意識調査の結果にも表われてはいたが、アメリカ女性の意思表示には、大変力強さを感じた。所長が保育者の理想像は、「子供にとって、何が一番大切かを常に考えて行動できる人」と答えたが、子供を信頼し、子供自身がもっている力を引き出そうとする教育姿勢は“J. Dewey”からの伝統と思われる⁸⁾（第5表）。

今後、保育の専門職として質的に向上していくことだけでなく社会的な地位の向上にむけて、こういった姿勢をぜひとも見習うべきだと考える。

保育者一人ひとりが、「誇り」をもちながらよりよい保育を実践していくことが必要である。

日本における保育所機能を高めるためには、子供の教育的機能を考えることはもとより、保護者や家族に対しても育児の教育的機能をもち、家庭との連携による教育的側面を充実させていくことが、急務だと考える。

このたびの視察で思い起こさせてくれたことは、James DickoffとPatricia JamesとWiedenbachの業績中に述べられていた看護実践の二つの“力の源”という内容である。

源の第一は、看護の質とその質に対する看護者の自覚と誇りゆえに看護そのものに感じられる喜びを得たいという願いである。源の第二は、第一の源に基礎をおく、自らに対する尊敬への願いである。

従って、看護者が自らの役割を果たすという責任感によって支えられていることを示唆していると考ええると、これら二つの力の源は偉大な力を発揮するであろう。

この二つの源は、保育実践においても十分生かされると思われる。

2) ボランティアの活動

私が訪問した際、ボランティアの男性に出会い、ディスカッションの機会を得、「この仕事で修行を積みたい」と話してくれたことに感銘を受け、保父の存在も大変意義深いものだと思感した（第5表）。

この男性は、既に小学校の教師として働いているが、長期に渡る夏期休暇の期間だけ、保育所の子供達のために毎日通って来てくれている。

アメリカにおけるボランティアの歴史的基盤を考えると、宗教的背景に支えられていること、自分自身を高める努力、つまり生涯教育の意義が重要視されていること、夏期休暇などは、教員の給与が支給されないが、その間の行動は自由であること、以上のような理由から、アメリカでは既にボランティア活動が社会的に評価されている。

最近、日本においても「ボランティア」に関する概念が明らかにされ、さまざまな対象に対して、有機的な活動が展開されはじめている。「ボランティア」に対するポジティブな面とネガティブな面を今後きちんと整理していく必要性はあると思われるが、この男性のように小学校の教師が、保育所を訪れ保父として活動してくれていることは、乳幼児期から学童期への一貫した保育体制がとりやすくなること、さらに乳幼児期からの健康上の問題などをスムーズに学校側へレポートできること、より教育的な側面を保母に替ってアプローチできること、保育所と学校との連携がより強化されること、などメリットな部分が多くあげられ、日本においても、こういった発想の教師達が出現することが期待される。

この保育所は特にCentral Washington UniversityのPreschoolということも関与していると考えられるが、「ボランティア」の活用も考慮してみることが大切だと思われる。

CHILD ADVOCACY COUNCIL（能力開発学習センター）では、保母職の他に医療職や心理系の専門職が勤務していたが、デイケアセンターだけでなく、こうした機関においても「ボランティア」の機能が生かされると考えられる。

多様な価値観、人生経験、生活経験をもっている人達がそれぞれに生かされる「場」の提供も必要であろう。

4. Primary care nursingと保育

日本においても近年、被虐待児症候群が少なくないことが明らかにされ、日本小児保健学会 (1994) でも大阪府、京都市を中心に、虐待予防を目的として実態調査報告や事例報告がなされている。

また、虐待を引き起こすハイリスク群が存在することも知られている。

小児社会医学の分野に関連するこうした子供達の問題を早期に予防するために、日本においても、より多くの研究がなされるべきであり、施設側だけの問題としてではなく、コミュニティレベルにおける保育システムのあり方として確立すべき視点の一つだと考える。

CHILD ADVOCACYで出会った一人の女の子、向こうから親しげに話しかけてくれたが、何か寂しそうな表情はかくしきれず、私の脳裏に焼きついてはなれなかった。人間的で温かい尊厳に満ちた保育が家庭で保障されない場合のインフォーマル・サポートシステムの充実が望まれる (第5表)。

近年、ケースマネジメントの有効性とその方法論が研究されつつある中で、個々のケースについて、ケア計画が実現できる地域でのネットワークづくりの必要性を痛感した。

日本の保育所長及び保母を対象に保育所の役割を尋ねた結果、「育児の指導・助言」に関しては、全体の5.9%の者しか解答しておらず、保育所スタッフが教育的な立場からもアプローチできる専門的施設として質を高めていく必要性を指摘してきたが、育児の指導的立場であることへの意識を高めるひとつの背景として、専門職としての姿勢が関連してくると思われる。

タイムスケジュールにそった保育内容や日常のケアについて、日本と米国を比較すると大差はなく、むしろ食生活の面などでは日本の保育所の方が豊富なメニューであった。だが、家庭との機能的な連携を図る際の対応に今ひとつ説得力がなく、今後はもっと自信をもってサービスを提供できる指導力を身につけることが緊要な課題だと考える。

また、保母職だけでなく、他のコ・ワーカーの人間達がそれぞれの専門性を生かし、それぞれの立場で子供達と関り、支えているといったチームワークの良さを見ることができた。日本でもチームナーシングの原理は導入されているものの、有機的に働いていない場合も見受けられるが、この点に関しては、

私達日本人が学ぶべきだと思われる。

より多くの専門家で子供達を支えていく考え方は重要だと考える。それぞれの専門性を明らかにし、評価の視点を確立していく中で、ケアのシステムづくりが形成されるであろう。

「生命」ある子供達の安全と健康を保障する保育現場におけるメディカルスタッフの適切な配置については、日米いずれも「専任と嘱託」のバランス、専門性と責任等の検討課題が残されている。

アメリカでは「Know Your Body」の重要性が提唱され、セルフケア能力の向上を目ざす健康教育が実践されている。

「自分の体は自分で守る」といった考え方を子供の生活の中できちんと確立していくためには、幼児期からのきめ細かな健康教育がぜひとも必要である。

意識調査の中で医師や看護婦に対する要望として「身体状態などを子供にきちんと話してほしい。じっくり話してやると子供は本当に理解力に優れている」と述べられていたが、日本においても、この「Know Your Body」の教育理念が根付いていくことが期待される。

おわりに

今回の視察から、アメリカのPrimary care nursingに学ぶべき点や、子供をとりまく環境に対して、現在アメリカが抱えている問題、そして解決すべき問題を把握することができた。

今後、教育理念に基づく「保育所プログラム」の検討を合わせて行い、アメリカのNursery Systemにおけるコミュニティでの位置づけや他の教育機関との関係を明らかにし、日本の保育実践に対する課題と展望を示唆していきたい。

子供の発達を総合的にとらえることのできる保育者を養成していく新しい保育教育の創造が急務だと考える。

謝 辞

本研究にあたり、視察を快く受け入れ、インタビューやアンケート調査にご協力いただきましたCentral Washington University PreschoolのJanie Charlton, Director, Child Advocacy CouncilのNancy H. Moss, DirectorならびにStaffの方々に心から感謝の意を表します。

参 考 文 献

- 1) Central Union For Child Welfare In Finland : Child Welfare in Finland, Finland, (1977)
- 2) World Health Organization : The Alma-Ata Conference on Primary Health Care, WHO Chronicle, 32, 409~430 (1987)
- 3) 田川智子：島根女子短期大学紀要, 26, 159~165 (1988)
- 4) 田川智子：島根女子短期大学紀要, 31, 103~112 (1993)
- 5) Diers, Donna. : Research in Nursing Practice. J. B. Lippincott Company (1979) [ドナ・ディーア著 小島通代他訳「看護研究—ケアの場で行うための方法論」, 日本看護協会出版会, 東京 (1984)]
- 6) Kempe, C.H., Silverman, F.N., Steele, B.B., et al : The battered child syndrome, JAMA, 181 : 17-24, (1962)
- 7) Giovannoni, J. : Definitional Issues in Child Maltreatment. In D.Cicchetti & V. Carlson : Child Maltreatment. Cambridge University Press, Cambridge, 3-37, (1989)
- 8) 金子光男：教育方法論, 酒井書店, 東京, 46~55 (1991)
- 9) Dickoff, James and Patricia James : A theory of theories : Nursing Research, 17: 197-203, (1968)
- 10) 内藤和美, 小林登, 多田裕ら：被虐待児症候群実態調査の報告, 小児科診療, 50 : 433-438, (1987)
- 11) Morse, J.M., Solberg, S.M., Neander, W.L., Bottorff, J.L., Johnson, J.L. : Concepts of caring and caring as a concept, Advances in Nursing Science, 13(1) : 1-14, (1990)
- 12) Steven P.Shelov, M.D., F.A.A.P., Robert E.Hannemann, M.D., F.A.A.P., Caring for Your Baby and Young Child : Birth to Age 5., Child Care Books from the American Academy of Pediatrics, U.S.A., (1993)
- 13) Ruth E. Cook, Ph. D., Virginia B. Armbruster, M. A., Adapting Early Childhood Curricula : suggestions for meeting special needs, The C. V. Mosby Company (1983)

(平成6年10月31日受理)